

新編 三文紳士

吉田健一



筑摩書房

〈新編〉 三文紳士

昭和四十九年八月三十日第一刷発行
昭和四十九年十二月二十日第二刷発行

著者 吉田健一

発行者 井上達三

発行所

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(元)七六五一(代表)
振替東京四一二三

印刷 株式会社 精興社
製本 矢嶋製本株式会社

© 1974, K. Yoshida

0095-81050-4604

Printed in Japan

三文紳士〈新編〉目次

I

我が青春記

留学の頃

仲間

酒と議論の明け暮れ

或る時代の横光利一

師走の酒、正月の酒

中村光夫

満腹感

末期の二等水兵

桜に錨のボタン

八月十五日

ああ 海軍百分隊

乞食時代

4

7

10

25

28

39

45

51

62

69

70

73

85

乞食の思想調査

あの頃

貧乏物語

世にも不思議な新聞社の話

福田恆存

飲食行

商 売

本 の 話

食べる話に飲む話

昔の思ひ出

家を建てる話

十年目の年末

最後のレジスタンス

我が人生処方

183 175 173 159 156 151 148 143 139 126 116 103 100 93

II

母に就て

196

父のスケツチ

199

父に就て

203

父のこと

209

蓬萊山荘

227

晩年の牧野伸顕

241

牧野伸顕

252

後記

285

三文紳士

〈新編〉

I

我が青春記

麹町区三年町の坂下に病院があつて、黒須先生といふ耳鼻咽喉科の名医に蓄膿症の手術をして戴いたのが、青春の始まりだつたと考へることがある。二十七、八の頃だつたと思ふ。随分遅い青春のやうでもあるが、この手術が見事に成功した後と、その前では、気分の上でまだ春になり掛りの曇つた日に雪が薄ら寒く降つてゐるのと、青空の下で桜が満開してゐる位の違ひがあるので、これを青春とさうでない前の境目にしたい。

桜が満開などと書くと、恐しく派手に聞えるが、これは精神的な面でのこと、生活が單調なのは前と別に変らなかつた。強ひて何か出来事を求めると、当時、伊藤信吉氏、山本健吉氏、それからフィリツピンで戦死した曾ての「文芸」の名編輯長、桔梗五郎氏などが集つて始めた「批評」といふ、文芸評論専門の同人雑誌に加り、他の同人は皆、出版社その他に関係してゐて差し障りがあるといふので、名義上この雑誌の編輯人、兼発行人を引き受けさせられた。

手術をしたのは、この雑誌が昭和十四年八月に創刊号を出した後だつたと記憶する。伊藤信吉、山本健吉、西村孝次などは、当時既に文学界にその名を知られ掛けてゐた人達で、その点で「批評」は

その頃も沢山出てゐた一般の同人雑誌とは少し違つた感じがした。

つまり、新聞や商業的な文芸雑誌にお座敷を持つた連中が発起人になつて、編輯者の註文に縛られずに、書きたい評論が書ける雑誌として「批評」が計画された訳である。

先輩との繋りも多くて（今ならばこれを、却つて窮屈に思ふ向きもあるのだらう。馬鹿げた話である）、創刊号には小林秀雄氏、第二号は柳田国男氏、三号には河上徹太郎氏を囲む座談会が載つて、以後、さういふ先輩を誰か一人呼んで座談会をやるのが慣例になり、それがかなり長い間続いた。横光利一氏や林房雄氏にも来て戴いたことがある。

もつと通俗的に青春的な面から言ふと、同人費を多く集める必要などから、余り選り好みせずに関人を作つた為に、その中には色々なのがゐて、同人会は議論が百出して賑かなものだつた。会は大概、その頃はまだ埋め立ててなかつた三十間堀の、「はせ川」の二階で開かれた。或る時、言葉といふものを何と見るかで、大論戦があつたのを覚えてゐる。要するに、言葉が文学の単位をなすものであるといふ意味で、これを一つの生命ある個体として扱ふ考へ方と、言葉の本質は民俗学、言語学その他の学問で科学的に研究出来るものだといふ考へ方が激しく対立したのである。

マラルメとマルクスの喧嘩のやうなものだつたから、結論は出なかつたが、その為に生じた反目のお蔭で科学派がいつの間にか「批評」から離れて行つたのは大助りだつた。

そしてかういふ根本的である割合には損得と関係がない問題にあれだけ血の道を上げられたのは、これは確かに我々が若かつたからに違ひない。

この雑誌の同人と付き合つてゐる間に、酔つ払ふことを覚えた。議論をする時には大きな声を出し

た方がよくて、一番大きな声が出せるのは酔つ払つた時だから、いやでもこの術を教へ込まれたのである。尤も、「何をツ」といふ風なことを言ふのではなくて、「君は、それなら、ヘルダアリンを何と思ふんだあ、」といふ調子でやるのである。そしてこつちは酔つ払つてゐるから、相手を压倒してゐるのが自分の精妙なる推論ではなくて、大きな声だといふことに気が付かない。だから、益自分の論理を信じることになるのである。これも青春のことであつて、それを思へば、自分にも青春といふものがあつたことが沁みじみ感じられて来る。

留学の頃

留学の頃

勘定して見ると、英国に留学して帰つて来た年から今日までに三十三年たつてゐる。そんな昔のことだつたのだらうかといふ氣もするが、行つた時にこつちがまだ十代だつたことを思へば、確かに昔のことなのである。当時、日本はその繁栄の絶頂にあつたと言ひたい所であるが、この頃はとも今日の日が日本が少くとも明治以後、最も国の基礎がしつかりし、凡てはこれからなのだと考へられてならない。兎に角、英国に立つたその昭和の初期には、日本といふ国がいやで仕方がなかつたのを覚えてゐる。現在でも日本はまだ過渡期にあると言へるかも知れないが、当時はもつとさうで、妥協することに対して潔癖な青年期にあつて過渡期の各種の現象が殊更に強く感じられたのだといふ風にもそれは説明出来る。そして妙なもので、英国に行つてからは英国といふ国が嫌ひになつた。確かに、英国もスペイン内乱と第二次世界大戦を控へて一つの転機に立ち、間に合せや、継ぎ剥ぎや、古いものの既に生命を失つた部分が目に付く時代に入つてはゐたが、要するに、これはこつちも普通の青年並の青年だつたといふことになりさうで、大体、青年期といふのがさういふやり切れない時期なのであり、青春を謳歌するなどといふことを言ふ大人も、青年も信用することが出来ない。

丁度、英国は夏で、それがやがて秋に変わった。今ならば文句なしに樂める所であるが、ベエトオヴエンの音楽がやつと音楽に聞え出し（初心者に聞かせるにはベエトオヴエンに限る）、奈良の仏様とダ・ヴィンチの絵が同時に美しく見え始めた青年には、英国の夏もそれに酔ふ倫理的な根拠がないといふ風なことになる、それと試験勉強で時間が過ぎて行くうちに、学校に入つた頃にはもう冬だった。ドストエフスキイを一番偉い小説家だと思つてゐた青年にとつて、英国の荒涼たる冬は詭へ向きだつた筈である。併し外界が余りに自分の精神状態と一致してゐるのも、殊にその精神状態の方が英国の冬のやうであれば、どうも有難くないもので、偶に日でも差してくれればと思ふ代りに、英国の冬の自然が示す通りに世界といふのは全く話にならない場所なのだといふ氣持が強くなつて行つた。當時は酒も飲まなかつたのだから、その頃とは違つた意味で全く話にならなかつた。

この頃程、絵や彫刻などを飽きることもなく見て廻つた時代はない。さうした美術品に惹かれるにはどんなものとも妥協する必要がないといふことが、今から思へば、一つの大きな原因だつたに違ひない。幸であるのか、生憎なのか、恐らく、幸なのだらうが、英国にゐれば美術品を見るのにこと欠かなくて、ロンドンの国立美術館で間に合はなくなれば、ヨオロツバ大陸に渡るのに一日と掛らない。冬の休みにバリに行つて、ルウヴル博物館の定期券を買つて毎朝、ミロのヴィナスを見に出掛けたのを思ひ出す。この彫刻だけが置いてある円い部屋の壁に沿つて腰掛けが作り付けになつてゐて、そこに腰を降して半日もこの彫刻を見てゐると、光線の差し具合に応じて彫刻が色々な具合に変化して行つた。今でもあの彫刻のことが頭に浮ぶと、海を思ふ。その印象はさうした広々としたものだつた。大理石の彫刻に色があることもこの時に知つた。

ワトオの絵を見付けたのも、この博物館でだった。何か多勢の十八世紀風の服装をした男や女が庭のやうな所に集つてゐる絵で、廻りの部分が変色して黒くなつてゐるのでその服装が一層煌やかに見え、そこに危機を孕んだ魅力があつた。余りこの絵に惹かれて、他にもワトオの「ジュビターとアンティオペ」とか、「シセラへの船出」とかいふ絵があつたが、その絵と違ふのでかういふ絵の前には長く立つてゐる気がしなかつた。そして結局、博物館をぐるぐる廻つてゐるうちに、その陳列品の中で好きなのはミロのヴィナスともう一つ、サモトラスの勝利像といふ首がなくて羽を抜けた女神の彫刻と、ワトオのその絵と、ダ・ヴィンチの絵が三点ばかりと、初期のイタリイの画家が一室に集つてゐると、それからコロオの「モルトフォンテエヌの思ひ出」といふ題の絵といふことに決つて、その間を往復した。パリにある建物の中で、あのルウヴル博物館にだけはもう一度行つて見たい。

ロダンの旧邸にその作品が集めてある博物館にも行つて、その一つの作品に付いてゐる題でポオドレエルの詩を知つた。その、「永遠の偶像」といふ題が「悪の華」から取つたものであることが解つてこの詩集を読み始めたので、これにも無条件に動かされた。併し勿論、かういふもの凡てが他人の仕事であり、他人が苦勞した結果であることを妥協することが嫌ひな青年は承知してゐた筈であつて、それ故にその時にはいい気持といふのか、何か息苦しい状態になつても、それは救ひにならなくて、それでもさうした筋が通つたものを見たり、読んだりしたのは悪いことではなかつたのだらうと思ふ。パリから英国に戻つて、その頃にロンドンのクインス・ホオルでベエトオヴェンの第九を聞いた。不思議に、さういふことの他に思ひ出すのが食べもののことであるが、そんなことを書いて見ても仕方がない。何か妙な留学だつた。併し損をしたとは思つてゐない。

仲 間

始めて大岡さんに会つたのが二十年前のことなだから、自分も年を取つたものだと思ふ。大岡さんはまだ京大仏文科の学生で、翌年の卒業を控へて朝日の入社試験を受けに上京した折、新橋のよしの屋の二階で会つたのである。他に河上徹太郎氏と佐藤正彰氏がゐたやうに記憶してゐる。当時既に河上徹太郎氏が主宰する同人雑誌「白痴群」に加つてクロオデルの翻訳を發表したりなどしてゐたのだから、大岡さんはただの大学生ではなくて、それで上京すれば、河上や佐藤といふ大人のインテリと飲んでゐたのである。筆者自身はどうかと言ふと、大岡さんよりも更に年下だつたが、大学中退の洋行帰りといふことで年の不足をごまかして、やはり大人のインテリと飲んで廻つてゐた。

併し早熟の点では、大岡さんには敵はなかつた。何しろ、河上、だとか、小林、だとか、誰でも相手を呼び捨てにして、それが別に可笑しくはない一人前の口の利き方をしてゐたのである。これを、この頃のやうに文学賞を何か一つ貰つて速製される新進作家の出世の早さに換算することが出来るならば、大岡さんは今頃は老大家の仲間入りをしてゐる筈である。それだけに、大学を卒業する頃から戦争が始まるまでの十何年かのことを少し詳しく扱ふことが、戦後の大岡さんといふものを説明するこ